

幼児期の思考力をとらえる

解説

遊びの中に表れる 思考の芽生えを見逃さず もっと考えたくなる 問いと環境を構成する

子どもたちは遊びや生活を通して、さまざまな資質・能力を発揮しています。特集②ではその中の「思考力」に着目し、ベネッセ教育総合研究所が幼児期に発揮される思考の働きを19の「思考スキル」として整理した、「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」(詳細はP.18~19参照)を手がかりにして考えていきます。保育者が幼児期の思考力の芽生えを見取り、より伸ばしていくにはどうしたらよいか、國學院大學の吉永安里先生にお話をうかがいました。



國學院大學
人間開発学部 子ども支援学科 教授
吉永安里先生(よしなが・あさと)

研究分野は、幼児期のことばの発達、小学校国語科教育。東京都私立幼稚園勤務、東京都公立小学校教諭、東京学芸大学附属小金井小学校教諭を経て、現職。著書に『幼児教育と小学校教育における言葉の指導の接続』(風間書房)、『保育内容「言葉」と指導法:子どもの心のことばに耳を澄まして』(共著、萌文書林)など。

思考する力は体験や感情と結びついて発揮され、深まっていく

幼児期に芽生えている思考 その特徴を知る

夢中で遊んでいるように見える子どもも、遊びの中で次々に問いを生み出し、自分なりに答えを見つけようとしています。そうした問題解決の繰り返しにより、思考力が育っていきます。しかし、背景にある思考のプロセスは、幼児の場合まだ言語発達も十分でないため、外から見えにくく、理解しにくいところもあるでしょう。子どもの姿から思考の芽生えを丁寧に見取り、より高まるように援助できることが、保育者の専門性といえます。

幼児期の子どもは、目の前にある具体的な物や経

験に結びつけて思考を働かせます。例えば、芋掘りをしたあとに収穫した芋を前にして、「一番大きいお芋を持って帰りたい」と考えれば、芋どうしを比べるといった思考が自然と働き始めます。こうした具体物や経験に基づく思考は、個人差はありますが、小学校中学年以降に数字を始めとした抽象的な概念が十分に理解できるようになると、具体物や経験を離れた思考へと変化していきます。

幼児期の思考力は知識・技能などと明確に分けることは難しく、遊びや生活の中で混然一体となって発揮されます。また、思考力などの認知能力は、自分の感情や自己認識、他者とのコミュニケーション能力といった社会情緒的能力とともに育っていくのも特徴で

す。例えば、園の友だちと一緒に楽しく掘った芋の中で一番大きい芋を見つけるといった、具体的で心動く体験と思考が結びつけば、子どもは自然に興味をもって探究し始めます。逆に、ブロックを意味もなく目の前に出されて「大きい順に並べて」と言われても、なかなか思考は動き出しません。さらに、保育者との間に安心できる関係があるかも重要です。保育者の声かけや環境構成により、子どもが安心して遊びに集中できると、その中で伸び伸びと思考が発揮されます。

幼児期の教育では、「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の3つの柱を一体的に育む大切さが、要領・指針^{*1}に示されています。幼児期には思考力だけを切り離して伸ばすのは難しく、子どもが興味をもてる体験を通してさまざまな資質・能力をバランスよく育てていくことが大切なのです。

思考スキルを用いて 子どもの思考の育ちを言葉にする

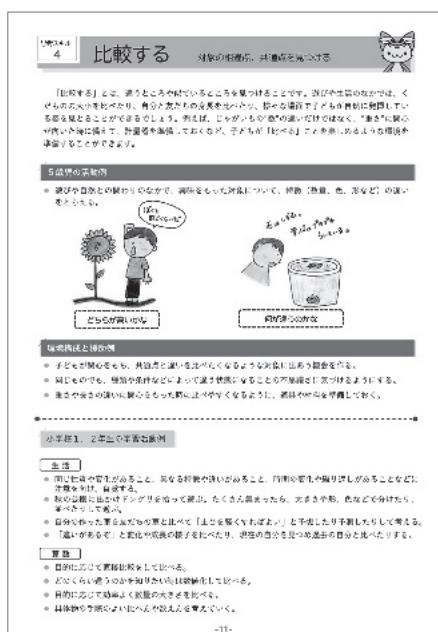
ところが、これまでの保育を振り返ると、資質・能力の見取りや育成にはやや偏りがあったように感じられます。思考力よりも、相手に共感する、友だちと上手につき合うといった子どもの情緒面を重視

する傾向が強かったのではないかでしょうか。もちろん、情緒的な育ちは非常に大切です。ただ、思考力などの認知能力は「すごいね」「頑張ったね」といった漠然とした言葉で語られがちで、その中身は十分にとらえきれていたなかったように思います。小学校以降の教育では、各教科の学習指導要領に育成すべき思考力が具体的に示されていますが、幼児教育では、そうした要素が明確に示されてこなかったことも一因といえるでしょう。

子どもの育ちを読み取る手がかりの1つに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい『10の姿』」(以下、「10の姿」)があります。これは、社会情緒的能力と認知能力による子どもの育ちが、環境の中で一体となって発揮される子どもの姿として示されています。さらにもう少し、認知能力である思考力をより明確に捉えるために活用できるのが、「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」です(図)。子どもが遊びや生活の中で発揮する思考の芽生えが、19の思考スキル^{*2}で整理されており、思考力の見取りや育成をする際の具体的なヒントを得ることができます(詳細はP.18～19参照)。

19の思考スキルを一覧すると、幼児期にも実にさまざまな思考パターンが働いていることがわかるでしょう。こうした枠組みを手がかりにすること

図 思考スキルの発揮の見取り方と援助の例～「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より



① 思考スキル

小学校以降の学習活動にもつながる思考力の枠組み

② 活動例

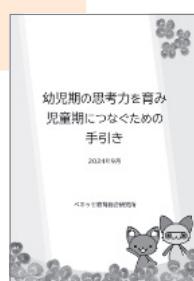
思考スキルを発揮していると思われる5歳児の活動の例

③ 環境構成と援助例

思考スキルの発揮を促す保育者による援助の例

④ 小学校での学習活動例

小学校(主に1、2年生)での学習活動例



※「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」より。(詳細はP.18～19参照)。

* 1 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。

* 2 考えるための技法。特集②(P.14～21)内では「幼児期の思考力を育み児童期につなぐための手引き」にまとめられている思考スキルを指す。



で、子どもの思考の動きをより的確に捉え、言葉で表現しやすくなると思います。ただ、注意したいのは、思考スキルは子ども一人ひとりの能力を評価するためのものではない、ということです。「10の姿」と同様に、あくまでも子どもの姿を通して保育者のかかわりや環境構成を見直し、よりよい援助へとつなげることで、子どもの思考を育む視点を得ることができます。

多様な思考力を育む視点をもち、日々の保育を振り返る

意欲的になれる問い合わせや環境を用意して子どもの思考を豊かにする

思考スキルを意識することで、子どもへの言葉がけや援助のあり方は変化していきます。ここでは、前述の芋掘り後に「一番大きいお芋を持って帰りたい」と思った、「比較」の思考スキルが働き始めている子どもについて考えてみましょう。

このとき、「みんなで頑張ったから先生が分けるね」と保育者がやってしまうと、結果的に子どもが考える機会を奪ってしまいます。例えば「だれのお芋が一番大きいかな？」と問い合わせたり、子どもの思考の動きによっては芋に巻いて太さを測る紙テープや重さを量るはかりを用意したりすることも考えられます。思考力を育むには、子どもたちが「何と比較して大きいと思うのか」といった、思考を揺さぶる問い合わせが重要になるのです。こうしたかかわりによって、子どもたちの中にも新たな問い合わせが生まれ、それを解決しようとする中で、思考はさらに深まっていきます。

別の例も挙げましょう。園庭にあるキャベツ畑で毎年モンシロチョウの幼虫がたくさん生まれて、クラスで飼育している子どもたち。あるとき園庭にアゲハチョウが飛んできたのを見て、保育者が「アゲハチョウはどこにすんでいるのかな？」とつぶやいたところ、それが子どもの問い合わせとなり、図鑑で調べたり、屋外に探しに出かけたりする姿が見られるようになりました。この場面でも、身近なキャベツ畑にいて、いつも飼育しているモンシロチョウと、突如、目の前に現れたアゲハチョウという2種類のチョウを比べる「比較」の思考スキルが働いていま

なげる際の共通言語として活用してください。したがって、「19の思考スキルをすべて育てなければならない」と考える必要はありません。大切なのは、どのような援助や環境のもとで子どもがどういった思考を働かせているのかを読み取り、それを伸ばす保育を考えていく視点を得る、ということです。

日々の保育を振り返る

す。さらに、保育者が「幼虫からどうやって成虫になるんだろうね？」と問いかければ、「変化をとらえる」「順序立てる」といった思考スキルも引き出されていきます。このように、今まで通りのかかわりの中で保育者が思考スキルの視点をもった問い合わせを投げかけることによって、子どもたちの世界の見え方は広がり、より豊かなものになっていくのです。

日々の保育が同じような活動の繰り返しだと、子どもの発揮する思考がごく限られたものになっていると気づくこともあるでしょう。そうした場合は、子どもが幅広い思考を発揮できるように、保育内容や環境を見直すことが求められます。その際には、「この思考スキルを育てよう」と決めて活動を構成するのではなく、子どもが「どうして？」と思える問い合わせや、やってみたくなる環境を用意することが大切です。そうすることで子どもの思考が自然に引き出され、やる気や集中力、友だちとのかかわりといった社会情緒的能力の育ちにもつながっていきます。

ただし、幼児期の遊びにおいて、思考スキルはすべての子どもに均等に育めるものではありません。問い合わせの種類によって発揮されやすい思考は異なりますし、個人差もあります。多様な経験を通じて、多様な思考が発揮されるような環境を整えることが大切なのです。



思考スキルを共通言語として家庭や小学校との連携に生かす

遊びの中で、子どもがどのような思考スキルを發揮しているのかが見えてくると、保育の振り返り方も変わってきます。「こんな問い合わせや環境があれば、もっと思考が深まったかもしれない」といった気づきが生まれ、次の保育に生かしやすくなります。園内研修などでも、思考スキルは保育者間の共通言語となり、話し合いを深める助けになります。動画や写真を使って保育の場面を共有し、「この子はどのように考えていたか」「どんなかかわりや環境があればもっと思考が引き出せたか」といった視点で話すことで、子どもへの理解が深まり、保育の質も高まっていきます。

思考スキルの枠組みは、保護者に子どもの育ちを伝える際にも生かせます。例えば、保護者に「楽しんでいました」「よく頑張っていました」と言っても、子どもの成長が十分に伝わらないことがあります。また、保護者の中には、幼児期から目に見える成果を求め、思考力を伸ばす市販のワークが必要だと考える人もいるかもしれません。だからこそ、遊びの中で子どもにどのような思考が見られたのかを

具体的に伝え、それが小学校以降の学びにつながっていく思考力の芽生えであると説明することが大切になっていきます。それが、ひいては家庭でも、子どもの思考力を促し、発揮できるようなかかわりにつながっていくでしょう。子どもの育ちを丁寧に伝えることは、保護者への子育て支援にもなるのです。

また、思考スキルは、小学校との接続を円滑にする上でも役立ちます。要録などに思考スキルの枠組みを使って子どもの育ちを記することで、学習指導要領などで思考力になじみのある小学校の先生にとっては、子どもの実態を知る大切な共通言語になります。ただし、小学校に引き継ぐ際に大切なのは、「この子にはこんな力が身についています」といった個人の能力の評価ではなく、「こんな環境の中でこうした援助により、こんな思考力を発揮していました」といった、環境とのかかわりや保育者の援助の中での子どもの姿を伝えることです。近年では小学校でも「幼保小の架け橋プログラム」^{*3}のもと、1年生では学校探検など、子どもが興味をもちやすい活動を取り入れています。子どもたちが園生活を通じてどのような環境でどういった力を発揮していたのかを小学校の先生と共有することは、こうしたカリキュラムでの効果的な指導につながるはずです。



保育者の みなさんへの メッセージ

子どもたちは、遊びの中で「これはどうなっているのだろう」「どうすればうまくいくのかな」などと考えながら、発見や感動を繰り返しています。その姿は、学校教育でも今後さらに重視されていく探究的な学びそのものです。こうした思考プロセスに目を向けると、幼児期の子どもに育っている豊かな力や可能性の大きさに、私たち大人は改めて気づかされるでしょう。ぜひ、こうした視点を保護者とも共有しながら、子どもの育ちを支えていってほしいと思います。そして、先生ご自身も、思考することを楽しんでください！

* 3 5歳児～小学1年生の「架け橋期」にふさわしい学びや生活の基盤を育むことを目的に、文部科学省が2022年度から推進しているプログラム。